

## 「触って見る動く生き物たち」展の成果と課題—展示空間と材料の考察を中心に—

蝦名敦子・馬場拓也

### Achievements and Challenges of the Exhibition “Touch and See Moving Creatures”: A Focus on Exhibition Space and Materials

EBINA Atsuko · BABA

Takuya

本考察は、2019年8月に行った展覧会「触って見る動く生き物たち」展について、2015年から開催してきた他の展覧会と比較しながら、展示空間と材料の問題を中心に成果と課題について検討するものである。

これまで同じ会場（弘前市百石町展示館）を利用しながら、造形遊びから立体、工作と子供の活動を取り入れたワークショップ型展覧会を年に一回の割合で開催してきた。その際、ワークショップの製作スペースと、展示空間の在り方という点が課題となってきた。展示会場と製作スペースを分けたり、また時には展示会場の中に製作スペースを設けたりしてきた。今回は、製作スペースと展示空間を分ける形で展示会場が作られていき、作品は作品として見せる展示空間が成立したと言える。

そのことによって、展示作品に距離感が見る者にも生まれ、それは幼児であっても感じられるもので、がむしゃらに展示作品の中に入って遊ぶような子供の姿は見られなかった。こうした作品に対する「距離感」が展示によって生まれ、鑑賞者を作品の展示方法によって誘導できるということを実感できたことは、大きな成果である。

結果的に、今回は作品展示を重視した展覧会となったが、それが本展覧会の展示における特徴と言ってよい。またそのことで、新たに見えてきた視点がある。「動き」という造形的な特徴をテーマにした際に、その「動き」を重視して多様な作品を見せる展示にするのか、あくまでも個々の作品の質に拘り作品の特長を生かした展示方法をとるのかでは、全く異なる展示スタイルになるということである。つまり、テーマである共通の「動き」と、個々の作品の質の問題で、本展覧会で言えば、教材のサンプルなのか、作品なのかという問題にも言い換えられる。

また材料について、子供が自発的に選択する場合は、使い慣れているものを選ぶ傾向がある。今回、新たに小枝を準備したが、造形遊びでの材料とは異なり、製作するために加工を施して使用する材料として、自然のままの木は小学校低・中学年生にとって一段と難しい材料であることが示唆された。同じ木の材料でも、使いやすいように加工されたキットは違和感なく使用できても、自然木には意外と慣れておらず、製作上の材料としては身近なものではなかったのである。会場の子供たちが全く近寄ろうともしない「距離感」が生まれていた。改めて学校の図画工作では、様々な質量をもつ材料に親しませたり慣れさせるその必要性について再認識させられる。

子供の表現活動を促そうとする本展覧会において、展覧会のテーマと展示作品の質の問題が伴う展示空間の在り方や、様々な質量をもつ材料の取り入れ方は、今後も常に考慮すべき課題と捉えている。